

# 彙報

## ● 淳和院舊蹟の調査

京都府史蹟勝地調査會は今年春夏に互つて三回、京都市の西郊西院村なる淳和院の舊蹟を發掘調査した。淳和院に就いては續日本後紀、三代實錄、類聚國史、類聚符牘抄等に淳和天皇、同皇后等に關聯しての記載はあるが、其位置を明にしたものはない。西院村字淳和院は俗に「すなる」と稱せられ、そこには方形を爲した遺蹟があるが、其間敷は東西南北共に略平安京條坊なる方二丁の丈尺に近いものがあり、從來も此地から蓮花紋の丸瓦、唐草紋様の平瓦及礎石を出土したことがあつて、それらの様式より推すも、平安朝初期の遺蹟を考へることが出来る。今回は更に其遺蹟を正確にするために發掘を試みられたのであるが、其結果、層位的の出土状態が認められ、布目瓦の碎片、齋部土器の破片、八瓣蓮花紋の丸瓦等の發見があつた、又地下六尺を掘下けたところで、板を

重ねて杭を以て支へたる溝に達したが、是は院内の舊大池より水を疏通したるものであらう。今回は方形遺蹟の西南の二箇所の試掘に過ぎなかつたけれども、平安朝初期の大館址たる事は疑ない、此發掘には調査委員西田直二郎博士等之に當られ其詳細は最近の同會報告に掲載せらる、筈。〔佐藤虎雄氏報〕

## ● 讀史會

例會 六月二十四日午後六時三十分から樂友會館第一號室に於て開催。三浦天沼兩教授中村講師其他出席者總て二十八名。左記研究の發表があつて十時散會した。

徳川時代の社寺領と其法規

三品 彰英君

當時の社寺領は幕府の朱印又ハ黒印に依て公的に認められた御朱印地乃至拜領地を稱するもの、單に私的なものに大別せられ、其中境内地は多く前者に、門前地は多く後者に屬するが、之に對する幕府の法規としては境内地等朱印地の永代賣買、政府及び民間の土地寄進、地形の變更、新築再興、領地の移轉及び名義の變更等の禁止に注目すべく、又境内地、殊に門前地に於ける興行物

遊女の取締は風紀の問題以外、社寺の繁榮を考慮に入るの必要もあつた爲め當局の苦心した所であり、又所屬の山林竹木伐採の禁止は社寺の尊嚴風致の保全以外に大木古木等天然記念物保護の意圖にも出でた云々。

法然上人繪に就て

井川 定慶君

本誌に掲載せるを以て内容の紹介を省略する。

### ●考古學談話會

例會 六月十七日午後七時から京都帝國大學學生集會場

乾室に於て開催左記の講演があつた。

南滿洲魏子窩遺蹟に就て 文學博士 濱田 耕作君

同上發見人骨測定に就て 醫學博士 清野 謙次君

共に去る四月中旬から五月に互つて南滿洲魏子窩に於ける東亞考古學會第一次發掘の經過を發表さるゝものであつて、當日は是等遺物の考古學教室に到着した機會を利して、主要なる遺物の展觀をなした。

### ●歐 米 史・界

萬國史學協會 昨年五月ジエネヴァに於て成立を見た

同協會は同十月その報告書の第一冊をパリで發刊した。百五十頁にも足りない小冊子ではあるが、同協會の成立、組織を精細に記し、附録として協會の規約原文を英佛獨西伊の各國語を以て載せてある。協會祕書たるフランスの Theiler 氏及びオスローの教授 Kofe 氏の序言があり、關係各國の史學協會の組織や、最近の各方面の歴史的消息を知るには極めて便利である。この報告書は定期には出さず、必要に應じて刊行し、五冊を以て一卷とする由である。

**ロンブスの古文書** Vergara 公爵家の所有にかゝるロンブスの貴重なる古文書は最近西班牙政府の手に收められた。多分セヴィルの古文書館に藏められるであらう。同古文書は非常に珍しいもので、合衆國の或る協會の如きは二百五十萬ベゼタスで譲渡を申し出た事さへある。

**猶太研究評論** パリから出版されて居る同誌はその第八十二號を Henri Lévy 氏の七十回誕辰記念號として同

氏の門下生及び友人等によつて氏に捧げられた論文を滿載して居る。卷頭に氏の著書目録を附し、諸家の猶太史及び猶太人の研究も亦豊富であつて、猶太史研究者を喜ばすに足るものである。Lévy氏はフランス猶太中央教會の大教師でもあり、又この雜誌の主筆でもある。

### 逝ける史學大家

中世美術史研究で名の高いフランスの Camille Enlart 氏は本年二月中旬六十五歳を以て逝かれた。氏の代表的な著述は *Manuel d'archéologie française* であるが、その中のゴチック美術研究はたゞフランスのみでなく、歐洲諸國から拉典東方にまで互つて居り、中世美術研究家には忘れる事のできない名著である。氏は Institut の一員であつた。

### 新著數種

*Les Premières Civilisations.* par G. Fougères, G. Contreau, R. Grousset, P. Jouguet, et J. Lesquier. (Paris, 1926)

之は Louis Halphen 及び Philippe Sagnac 兩氏監修の下に二十卷を以て完成すべき「民族及び文明、一般史」の第一卷である。即ち有史前の埃及に始まつて、波斯王

Cambyse の埃及征服に至る迄が收められてある。しかもその間に於けるバビロニア、アッシリア、クリート、初期の希臘、フェニキア、ヘブライ等の文明の記述も含まれて居るのであるから、僅か四百餘頁の著作としては、やゝ範圍が廣すぎるかと思はれる。所々に文献及び發見史料の用ひ方の不統一、年代の取扱の不一致の見出されるのは、範圍が廣すぎて、一學者の手によつて全部を書く事が出来なかつた爲に生じた不便不利益であらう。然しこの缺點は *Byzans* 墓銘やクリートの *Mallia* の宮殿の所藏物等を使用して書かれた諸章の嶄新、スメリア及びバビロニア文明の記述の卓抜なる事等によつて充分償はれて居るに云へよう。脚註及び參考書目も充分盡くされて居る。民族及び文明を理論的に比較綜合して古代史攻究の人々に與へる所の少くない好著である。

*The Cambridge Medieval History.* Vol. V. *Contest of Empire and Papacy.* Edited by J. R. Tanner, C. W. Previté-Orton, and Z. N. Brooke. (Cambridge, 1926)

色々な事情から遅延を重ねて居たが、その結果はこの

誇るべき大著となつて吾々の前に現はれた。一〇五〇年

——一二〇〇年の間の皇帝權及び法王權の確執の時代がその一千頁餘の間に收められて居る。各寄稿家はその専門によりそれ／＼豊かな學識を以てその責任を果し、讀者に多分の満足を與へてくれる。各章にも最近の史料、

文献を遺憾なく用ひて綿密に記述されて居る。た

つ／＼は故 Corbett 氏の *Domesday book* によるノルマン時代の英國の研究等は暗示的な且つ興味多いものであり Previte Orton 氏の *"Italian cities till about 1200"* 或は Passant 氏の *"The effects of the Crusades upon western*

*Europe"* も逸すべからざる章である。地圖、索引、參考圖書解題等に就いても申分はない。たゞ強いて希望を述べれば、同一事件の説述の重複を避けたい事、中世の歐洲文明全體としての統一的傾向に論及して欲しい事であるが、之にも多くの寄稿家が分章的に執筆するからる著述には望む方が無理かも知れない。それよりも吾はかゝる賞むべき著作を生み出した編纂者と出版者に多大の感謝を送るに共に、中世史にこの權威ある著を

得た事を深く喜ばなければならぬ。

この書は他方出版に至る迄に數人の寄稿家を失つた點から言へば、その人々のよき記念物とも云へる。前記の故 Corbett 氏を始め Chandon 氏及び Balcani 伯等がそれである。

Meierich, der Staatsmann und der Mensch. Von

Heinrich von Srbik. 2 Bde. (Munich. 1925 und 1926)

ウィーン大學の von Srbik 教授は數年の研究の後、此處に十九世紀初期の歐洲外交界の中心人物たるメッテルニヒに關する大部の著を完成した。第一卷はメッテルニヒの幼時から一八三五年に至るまで、第二卷はその後一八五九年死に至るまでを收めてある。メッテルニヒの歐洲史上占めるべき位置からして明かな如く、この著書は一方その傳記であると共に、他方當時の歐洲外交史でもある。著書はこの書を成す爲めに極めて多くの各國の文献を漁り、且つその上新らしくメッテルニヒ家の古文書やウィーンの官立文書館の文書等を用ひて居る。二卷を通じてメッテルニヒの本能的な革命恐怖の由來、ナポレ

會報

オンが彼に與へた影響、露西亞の優勢に對する彼の態度、  
デンツの影響彼の所謂「政治的形而上學」、東方問題に於  
ける經過、輝き少なきその晩年の生活等が、中でも最も  
興味深く讀まれるものである。第一卷ではやゝ辯護的、  
時には賞讃的な態度も見られるが、第二卷では公正な論  
評が下されて居るのは喜ばしい。就中メツテルニヒに對  
して、スタイン及びビスマルクを呼び起してその相似、  
對照に筆を及ぼして居るのは注意すべきである。事實の  
説述よりも論評に急ぎすぎた點、或はメツテルニヒにや  
ゝ親切な筆致を用ひた點等が數へられたとしても、尙こ  
の新著は文書利用の方面から見て、外交史に有益な材料  
を供するに共に、かの大宰相の生涯、その思想、環境に  
就ての最も新らしく又優れた著書である事を誇るに足る  
べきものである。〔猪谷〕

●前號 正誤

誤 正

一九頁二行

法學士

經濟學士

八二頁下段  
十七行

4, nu-dh (or hi)-a

4 nu-dh (or hi)

八三頁挿圖

(表面)ニあるは裏面にして裏面ニあるは  
表面の誤り且つ裏面の方は轉倒してゐる

八七頁下段六行

13. say.....

13. sag.....

八九頁下段十七行

ダリウス二世

ダリウス一世

●寄贈交換圖書

南朝の研究(中村直勝著)

星野書店

東亞年契(廣瀬都巽編)

著者

日鮮史話第三編(松田甲著)

著者

朝鮮史料展觀目錄

朝鮮史編修會

長慶天皇御陵の研究(島田泉山著)

著者

史蹟名勝天然記念物 一の六、七八

同保存協會

歷史地理 四九の六、五〇の一、二 日本學術普及會

經濟論叢 二四の六、二十五の一、二、三 京大經濟學會

國學院雜誌 三三の六、七、八、九 國學院大學

史學 六の二、三 三田史學會

考古學雜誌 一七の六、七、八、九 考古學會

人類學雜誌 四二の五、六、七、八 東京人類學會

龍谷大學論叢 二七四、二七五 龍谷大學論叢社

觀想 三八、三九、四〇 東洋大學

中央史壇 一三の七、八、九 國史講習會

史學雜誌 三八の七、八 史學會

民族 二の五、六 民族發行所

考古學研究 第一輯 考古學研究會

東洋學報 一六の二、三 東洋協會學術調查部

佛敎研究 八の三 大谷大學佛敎研究會

T'oung Pao(通報) Vol. XXV No. 1-2 Paul Pelliot

● 會 員 動 靜

● 入 會

京都帝國大學文學部史學科

猪谷 文臣氏

大高 常丸氏

● 退 會

新潟縣高田中學校

(右紹介者 原弘二郎氏)

森 瑞樹氏

堺市寺地町西町二三

(右紹介者 中村喜代三氏)

會根 研三氏

東京市外池袋五八八

(右紹介者 平泉 澄氏)

田中順之助氏

大阪市北區善源寺町三ノ一四

(右紹介者 新町徳之氏)

宮本三七雄氏

埼玉縣浦和町岸町二七一四

(右紹介者 丸山二郎氏)

井上 忠義氏

京都市上京區下鴨半木町七七ノ一、松浦方

佐々木茂八氏

京都帝國大學文學部史學科

太田喜久雄氏

同

宮川 善造氏

同

石原 次郎氏

(右紹介者 島田貞彦氏)